

# 篠前山 2・3 号窯跡再考

水谷 壽克

## 1. はじめに

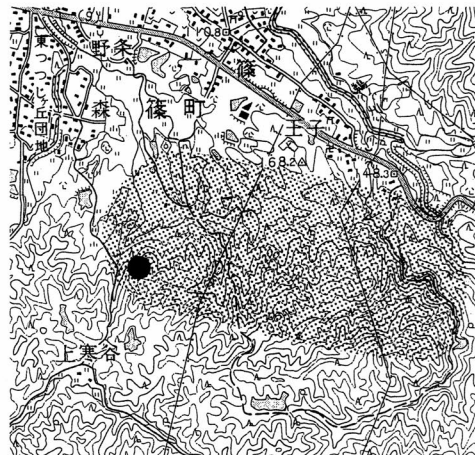
篠窯跡群は、亀岡市篠町森から王子に至る、東西3.5km・南北2kmの丘陵一帯に広がり、奈良時代から平安時代後期まで連綿と続いた一大窯業生産遺跡である。分布調査等により確認できた窯跡は97基を数える。京都縦貫自動車道老ノ坂亀岡道路建設等の調査により、須恵器窯跡22基(半地下式登窯16基・小型三角窯4基・ロストル式小型窯2基)、窯状遺構6基、窯業関連遺構2か所等を確認した。その結果、8世紀から10世紀にかけて東から西へと窯が築かれる傾向が見られること、10世紀を境として登窯から小型平窯へと窯体構造が変化することなどが明らかとなった。<sup>(注1)</sup>

また、篠窯跡群は、操業が開始された8世紀段階では丹波国府や国分寺等に製品を供給する一地方窯として機能したが、長岡京・平安京に遷都されると、一大生産地に変貌して畿内周辺各地へ製品を供給している。特に緑釉陶器や鉢は近畿以西を中心として広く流通している。<sup>(注2)</sup>

緑釉陶器生産の開始および小型三角窯の出現は、篠窯跡群における生産体制に大きな変貌をもたらす。今回、その契機となった前山2・3号窯跡について、遺物の地区割り出土状況から検討を加えたい。

## 2. 立地と検出状況

前山窯跡群は、西前山窯跡・袋谷窯跡とともに篠窯跡群の中で最も西端に位置する窯跡群である。9世紀中葉の半地下式登窯の1号窯と、10世紀前半の平面三角形を呈する平窯の2・3号窯で構成されている。特に前山2・3号窯では、黒岩1号窯とともに緑釉陶器を焼成している。



第1図 窯跡位置図(1/50,000)

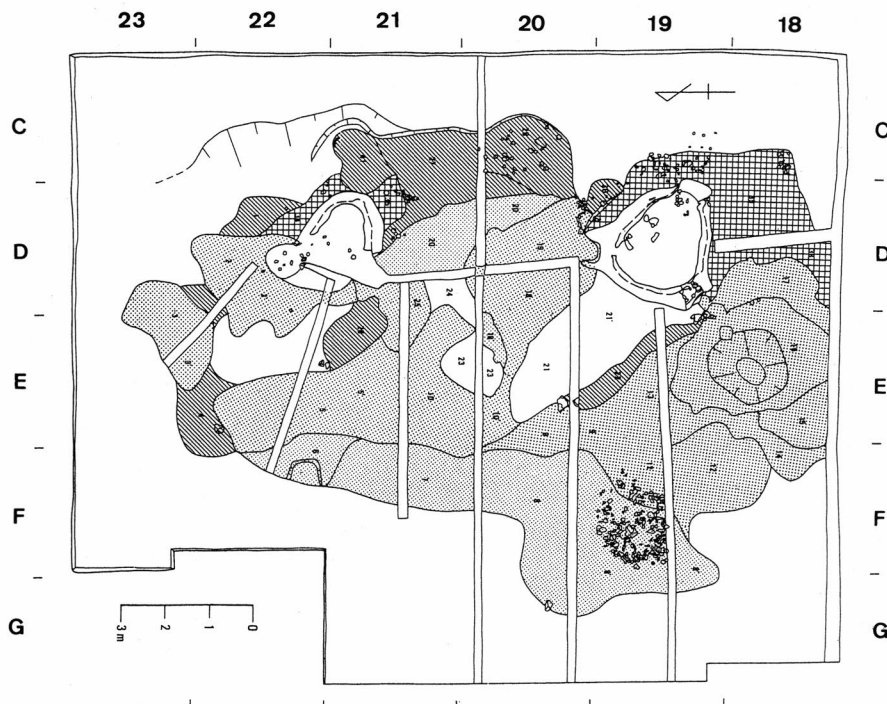
窯跡群の立地・検出状況について、概要報告

書から簡単に紹介しておきたい。<sup>(注3)</sup>

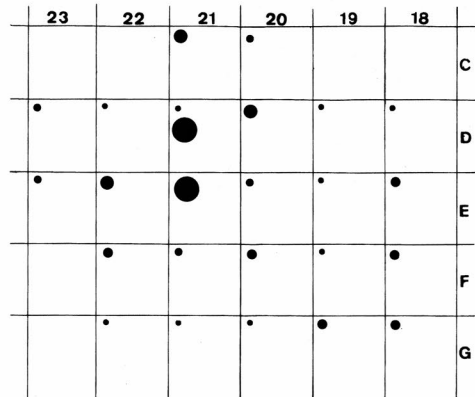
前山窯跡群は亀岡市篠町森前山あり、北に向かつてのびる丘陵西側斜面、標高約150mに築かれている。1号窯は約30度程の傾斜地に立地するが、南約14mに位置する2・3号窯は、東西約15m・南北約30mの斜面を削平して整地し、10～20度の緩傾斜面に築いている。2号窯の中軸線より南へ約7mの地点に3号窯が築かれている。平窯は、暖斜面に直交して築かれ、一辺2m程の三角形を呈している。機能的には、三角形の頂点を煙道部、底辺の2隅を焚き口部とする。

2号窯は、南焚き口部が壊されていたため実寸は得られないが、底辺部窯壁長約1.5m、内法での主軸長1.4mを測る。煙道部は52度の傾斜で立ち上がる。焚き口部の両壁には高さ約20cm、厚さ約15cmの自然石が縦長に立ててあった。焚き口幅は36cmを測る。床面の傾斜角度は8度である。床面には直径約10cm、深さ2～3cmの浅い窪みを16か所検出した。床面のおよその面積は1.5㎡である。

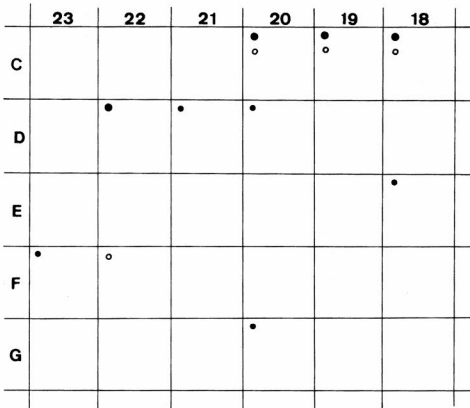
3号窯は、窯壁の遺存状況が非常に良く、底辺部で40cm、側辺部で60cm、煙道部で45cmの高さで残っていた。底辺部窯壁長1.8m、内法での主軸長1.8mを測る。煙道部は45度の傾斜で立ち上がる。両焚き口部とも粘土塊がつめられ密閉された状況で検出された。焚き口幅は約50cmと推定する。床面の傾斜角度は8度である。床面には直径約10～15cm、深



第2図 前山2・3号窯灰原検出状況(注3文献より)

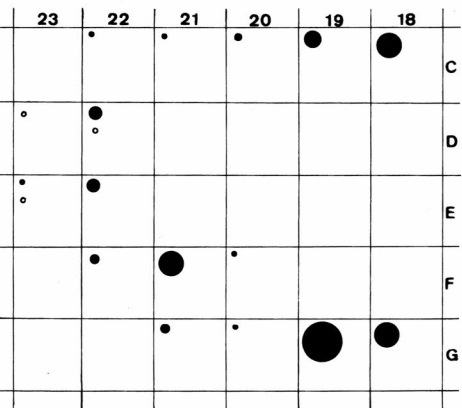


緑釉陶器 ●



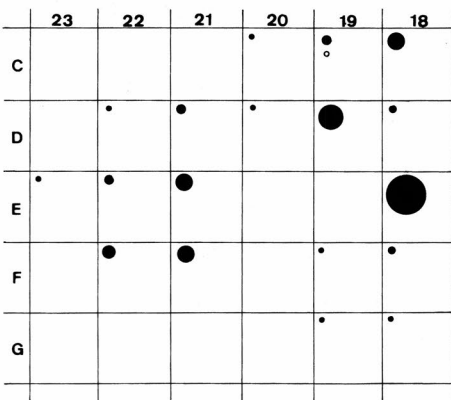
杯A ●

碗B ○



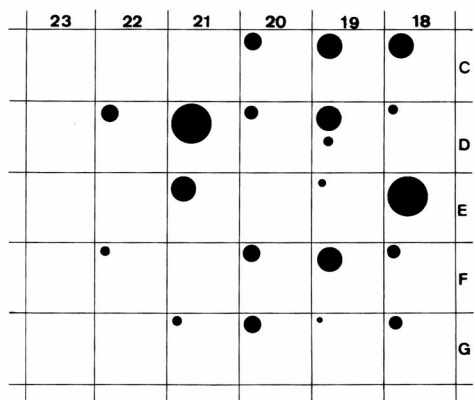
皿C ●

皿F ○



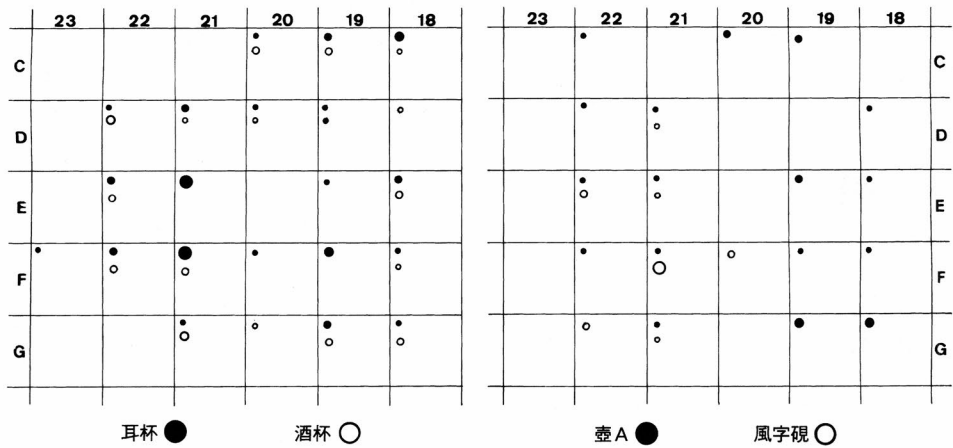
碗C ●

碗D ○



鉢C ●

第3図 器種・地区別個体数(1)



第4図 器種・地区別個体数(2)

さ2～5cmの不正形の窪みを19か所検出した。その1箇所に焼台が残っており、焼台を据え付ける窪みであることが判明した。床面のおよその面積は1.7㎡である。

灰原は、南北17m以上・東西約12mの範囲に広がる。各窯跡とも焚き口2か所から扇形に、また煙道部を壊して掻き出された灰原が広がる。灰原が無いのは各窯の底辺の外側と窯間の僅かの高まり部分である。

2号窯南焚き口部より掻き出された灰原には、3号窯の灰原が覆い被さっていた。また2号窯の南焚き口部は壊され、3号窯の灰原が広がっていた。灰原の堆積は、谷部に入るほど厚くなるが、厚いところでも20cm程度である。

### 3 遺物の内訳

窯体や灰原内より出土する須恵器は、器種・器形において2・3号窯とも時期的な変化がみられないことから、報告書では2・3号窯出土遺物として報告している<sup>(注4)</sup>。

出土した須恵器は、杯A・B、蓋C、椀B・C・D、皿A・E・F、鉢A・B・D、耳杯・酒杯・瓶子・風字硯である。

灰原は、濃黒色・黒色・黒褐色・暗褐色に色合いが変化して堆積していたが、2・3号窯灰原の重複部分では、層位的な識別は困難であったため、3m方眼の調査区を設定して遺物を取り上げている。

2号窯の灰原は、北焚き口部で22-D区・23-E区、南焚き口部で21-D区・21-E区、煙道部の21-C区に広がる。

3号窯灰原は、北焚き口部で20-C・D・E区・21-C・D・E・F区・22-E・F区、南焚き口部では18-E区・19-E・F区・20-E・F区、煙道部で18-D・19-D区に広がる。

器種ごとの分類可能な地区別個体数は第3・4図のとおりである。そのうち蓋C・杯B・皿A等は灰原内より数点が出土するのみで、明らかに隣接する前山1号窯と同時期(9世紀中葉)の形態を示す器種であることから除外して考えたい。

各器種の出土位置から判断して、以下の傾向が得られる。

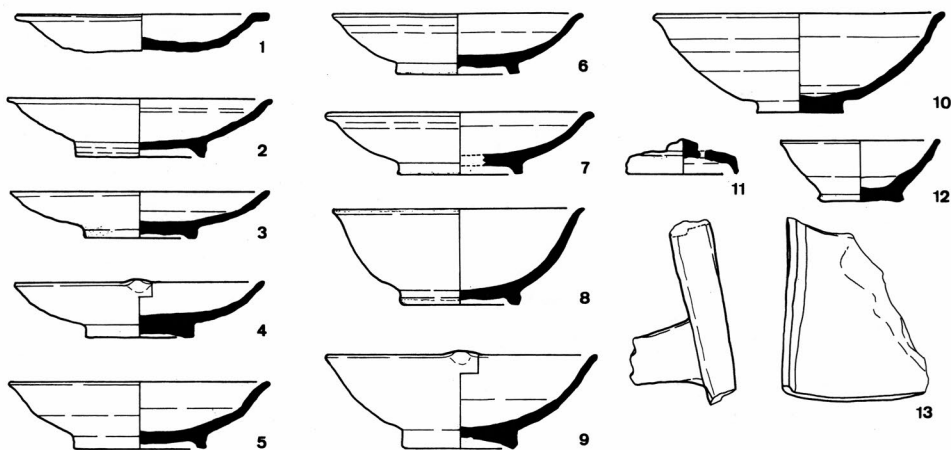
緑釉陶器片は250片余り出土した。2・3号窯出土遺物総数の約2.5%である。椀C・皿Cがほとんどで、酒杯・蓋が各1点出土している。出土地点では灰原のほぼ全域に広がっているが、焼成回数・成功率に起因してか2号窯南焚き口部に集中している。

杯A・椀B・椀C(緑釉陶器は除く)・皿C(緑釉陶器は除く)・耳杯・酒杯・壺A(瓶子)・風字硯は、出土地点に集中する箇所はあるが2・3号各窯の灰原から出土している。ただ3号窯出土遺物の割合から考慮すれば、耳杯・風字硯は2号窯で焼成されたものが多いことが指摘できよう。

皿Fは、22-D区、23-D・E区から出土するだけで、2号窯でしか生産されていないと考えられる。鉢Cは、2号窯北焚き口部の22-D区・23-E区からは出土せず、3号窯でしか生産されていない可能性が高い。

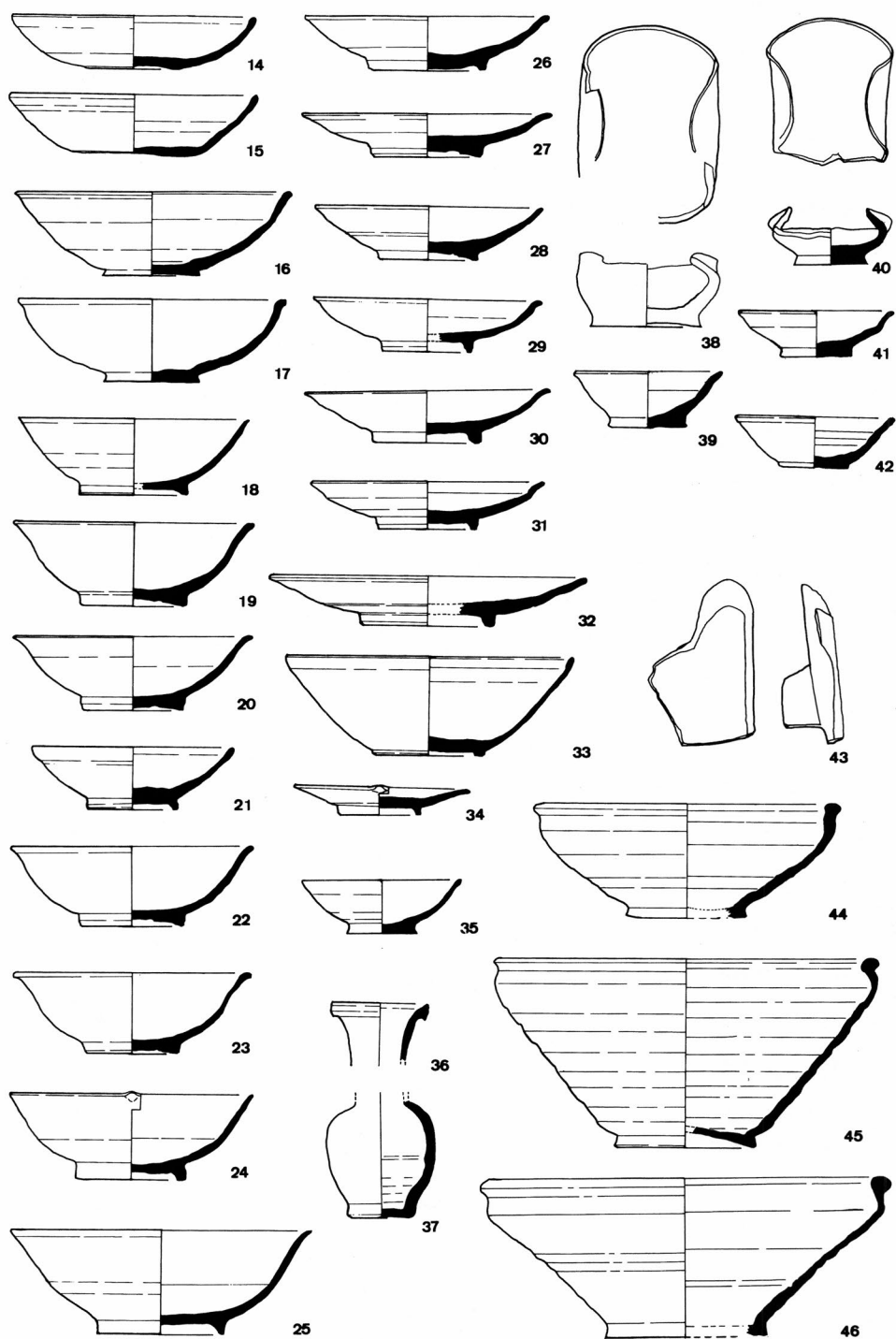
このような点から2号窯が3号窯に先行するもののほぼ同時期に築窯されたと考えていた窯跡に若干の器種構成の変化が見られる(第5・6図)。

さて、前山2・3号窯の出土遺物総数の割合では、椀が全体の77.4%、鉢が9.3%、皿が7.8%と全体の94.5%を占める。次いで杯が1.9%となり他の器種は1%未満である。前山2・3号窯に先行する西長尾3号窯では、椀が62.3%、杯が16.5%、鉢が13.6%、壺が7.4%、皿が0.1%、後築された黒岩1号窯では、椀が81.9%、皿が8.8%、杯が7.5%、鉢が



第5図 前山2号窯出土遺物実測図(S=1/4)

皿F(1)、皿C(2~7)、椀C(8・9)、椀B(10)、壺蓋(11)、酒杯(12)、風字硯(13)



第6図 前山3号窯出土遺物実測図(S=1/4)

杯A(14・15)、碗B(16・17)、碗C(18～25)、碗D(33)、皿C(26～32・34)、  
酒杯(35・36・41・42)、耳杯(38・40)、壺A(36・37)、風字硯(43)、鉢C(44～46)

0.9%となり、前山2・3号窯を契機として椀・皿の増加が目立つ。<sup>(注5)</sup>

#### 4. まとめ

小型三角窯は、焼成面積や燃焼調整等の構造から緑釉陶器の二次焼成窯として築かれたと考えられる。

京都市周辺の緑釉陶器生産遺跡では、市内北部の岩倉を中心とした洛北窯跡群、市内西部大原野を中心とした洛北窯跡群、老ノ坂峠を越えた丹波篠窯跡群に分かれる。洛北窯跡群では、平安京造営にともなって官窯として築かれた栗栖野瓦窯跡群があり、栗栖野13号窯跡から椀・皿・火舎などの緑釉陶器が出土している。9世紀前葉から生産が始まり、妙満寺境内窯跡・本山窯跡、10世紀初頭の栗栖野3号窯跡まで続く。胎土はおおむね軟質である。底部は平高台・蛇ノ目高台のものが多く、釉は全体に淡色である。洛西窯跡群では、石作1・2号窯跡から9世紀後半の陰刻花文・輪花をもつ椀・皿や香炉・壺・唾壺などが出土している。須恵質に焼成し緑釉の二次焼成を施している。底部は平高台・蛇ノ目高台の他、前山・黒岩窯にみられる削り出しの輪高台がある。続いて小塩5号窯跡、小塩1・2号窯跡へと10世紀後半期まで生産される。小型三角窯は石作1・2号窯跡で確認され、小型窯の初現となる。

このように緑釉陶器の生産時期については、9世紀前半より洛北窯跡群、10世紀を境として洛西窯跡群・篠窯跡群へとおおむねその変遷がたどれるが、小型窯築窯の経緯については今後の課題としたい。

緑釉陶器生産の導入により篠窯跡群の須恵器生産は大きく変貌する。前山2・3号窯を契機として椀・皿といった食膳具の小型製品のみを生産し、西長尾5・6号窯にみるロストル式楕円窯など小型特殊窯による須恵器生産を行い、登り窯の操業を行わなくなる。その後、輸入陶磁器や瓦器等の普及により、その需要が激減し篠窯跡群は終焉を迎えるのである。

篠窯跡群では前山2号窯跡が小型三角窯の初現である。その転機となる窯跡の出土遺物の器種構成を、灰原の重複・遺物量等その制約のなかで若干の考察を試みた。傾向は示せたものの不十分である。西前山窯跡では前山窯跡群と同様に9世紀中葉の登り窯とともに、近隣に10世紀代の椀・皿が出土する地点があり、緑釉陶器の二次焼成窯として小型の三角窯が築かれた可能性<sup>(注6)</sup>がある。今後の篠窯跡群調査の成果に期待したい。

小文作成にあたっては、当時の調査担当者安藤信策氏(京都府立山城郷土資料館)に地区別出土状況の資料を提供していただき、また、同僚石井清司氏には多大の協力を得た。末筆ながら記して感謝したい。

(みずたに・としかつ=当センター調査第2課長補佐兼調査第1係長)

- 注1 篠窯跡群Ⅰ(『京都府遺跡調査報告書』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984  
篠窯跡群Ⅱ(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注2 石井清司・水谷壽克「古代における生産と流通」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996
- 注3 「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981
- 注4 前掲注1・注3文献参照
- 注5 各窯跡の出土遺物集計は、注1『篠窯跡群Ⅰ』に準拠して行った。
- 注6 「西前山窯跡群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986